

ふるまひの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるまひの歴史 風

第四十四号 (二〇一〇年一月)

風に吹かれて (10-01)

白井啓治

『わかれ道 足はみぎむき心はひだり』

年が明けて、一年の計は元日にありとばかりに、今年はいよいよと心に決め、一夜明けた途端わが足は違う方向を向いて歩きはじめる。しかし、こんなことは年の計に限らず、何事にも日常に頻繁することである。

「いいじゃないか。そう堅い事を言うな。前に進んでいるのだから、右だつて左だつて」

それこそ気づいていけば、また意識できていれば後戻りだつて構わないだろうと思う。途中放棄さえしなければ私の好きな「敗戦も当に風流なり」である。

本会の菅原兄ではないが、人間とは実に際限のない欲深な生きものであるかと己を省みてそう実感させられる。欲深であるがゆえに「一年の計は…」などとといった戒めを持つて己を規制しなければならぬだろうと思う。

普段もそうなのであるが、特に年末年始になると全くの単身生活になり、これ幸いとばかりに思いつくままにあれこれ始めるのであるが、この年末年始は寒波の到来で、「色より可愛い抱き火鉢」の体で、山頭火の句集と水上勉の「一休」を手

炬燵にすっぽりと潜り込んで過ごした。猫の耳ちやんはわが腹を枕にしてご満悦であった。

以前、私の机の上の本棚に、三好達治の文庫本の詩集が何年も片付けられることもなく、辞典の影に堂々と存在感を示してあることを書いたが、山頭火と水上勉の「一休」、そして藤沢周平の「一茶」は意識的に辞書類に並んで本棚に場所を得て在る。

山頭火の句集は、私の一行文詩の師匠のようなものなので、何かにつけて開いて読んでいる。一休と一茶は、作品よりも、その人物その人の生きざまが私に共感するものがあり、私自身もかくありたいという事で時折開いて読んでいる。勿論、水上勉という作家、藤沢周平という作家の作品である以上物語そのものは両作家を表現するものではなく、私の考えとは異なる部分もある。しかしながら、一休も一茶も、私もかく生涯でありたいと憧れる人物である。

炬燵に潜り込み、首だけを出して一休を読みながら、我も77歳になり、森女を得て88歳まで旺盛な動物的英雄であり人間的な男で在り続けられるであろうか、と些か意気地ない気持ちにさせられる。

朗読舞劇団ことば座の女優小林幸枝さんには百の恋物語を約束しているが、まだ四分の一までし

か書き上げていない。年間十話書き上げたとして、完成する時には一休宗純が森女と住み始めた歳になる。その時に、一休宗純と同じように私も風狂にいたる事が出来るであろうか、些か自信の持てないところである。いま当会の打田兄がその歳にある筈なので一度確かめておいた方が良いかもしれない。

打田兄といえ、その精力的な執筆には脱帽である。当会報への原稿、昨年暮れより始まったふるさと知ろう会の朗読原稿、その他文章同行会への原稿、市報への投稿原稿と毎月百枚近い、いや越しているかもしれない原稿を書いておられる。その旺盛な執筆欲は一休宗純に通じる自己愛を裡に内包させているのではないかと思う。

さて、唐突ではあるが、炬燵に潜り込んで読んでいる一休宗純の詩を紹介しておこう。

恋法師一休自賛

生涯の雲雨、愁にたえず、  
乱散の紅糸、脚頭に纏わる。  
自ら愧ず狂雲佳月を妬むことを、  
十年の白髪、一身の秋。

美人の陰に水仙花の香あり

楚台まさに望むべし更にまさに攀ずべし、  
半夜玉床愁夢の顔。  
花は綻ぶ一茎梅樹の下、  
凌波の仙子腰間を遶る。

この詩を読みながら、自分は果たして80歳をすぎて、このような詩を詠めるのであろうかと見えぬ先に不安を覚えた正月であった。

狙いだめて 恐れず  
諦めず 飛び出そう

貧の年にちえこ

皆様にはお健やかに新春をお迎えの事と存じます。今年も皆様の熱いエールとご指導を頂きながら、今までご紹介出来なかったホットな石岡の歴史を尋ね、お伝え出来ましたらと思いを新に立てました。宜しくお願いいたします。

『若水に舞う墨の香』

小さかった頃に、我家（旧玉造町）の正月の三日は父の用意する雑煮を頂いた。

その頃は手で掘った井戸（十メートル位の深さでも地下水がみるみる湧き出てきた）から細長い竹棹の先に括りつけられた木桶で汲みあげ、馬穴に溜められていた。そして洗用、飲用とに別けられ、それぞれに柄杓で汲み使われた。

元日、早朝に汲みあげた水は、若水とか初水と言われ、「歳神さま」に供えたり、口をすすいだり、沸かして福茶などといって家族揃って飲んだり、雑煮の支度に用いたりした。新年早々、このように用いるのは、若水には人を若がえらせたり、邪気を祓ったりする力があると考えられていたという。正月に関する事は一切父が行っていた。

『見ぬ人は汲みて知るらん小目井の  
清き流れの千代の行末』

（府中六井のうち小目井に添えられた歌）

石岡は筑波山系の清らかな水と肥沃な土地から古代より、こんこんと湧き出る美しい水の流れを

中心として、人が集まり、常陸国の府中を形成してきたといわれている。

中でも府中六井と呼ばれた六つの泉は「石岡を育てた産水であり、乳房であるといつてよい」と称えられ、生命の源と尊ばれていた。この豊かな、美しい湧水によって江戸も明治も大正と石岡地方は県内最大の醸造町として発展して行きました。しかし、昭和の中頃、三十年代になると、その地域の自然環境によって産み出され、人々の生活の中で育まれ、親しまれてきた「水環境」とそれを取り巻く様々な現象は次第に忘れ去られて行き、こんこんと湧き出る美しい水の流れを知る人もいなくなっている。

子は清水

市内大字村上に、子は清水という小字がある。ここは、親は諸白（上質の酒）、子は清水の伝説で知られる清水が湧きだしている。

昔、村上の地は「村上千軒」と言われる程の大きな村であった。この村に貧しい親子が住んでおった。親孝行な息子は、山に出掛けては薪を採り、町に売りに行って暮らしを立てておった。年若い父親は、病気がちで、息子が買って来てくれる酒が何よりも楽しみであった。そんなある日、売れない薪を背負って、途方に暮れていると、香ばしい匂いが漂って来るではないか。それは木立の中から、コンコンと湧き出ている清水であった。

これを瓢箪に詰めて、父に飲ませると、父はその諸白のうまさに驚いた。翌日息子は、あまりの不思議さに湧き水の場所に行つて飲んでみると、ただの清水であった。それ以来、毎日この清水を父に飲ませると、病気がちだった父も元気になって、

二人とも幸せな日々を送ることが出来たという。

この、親が飲めば諸白、子が飲めば清水という養老孝子伝説は古くからこの地方に伝わっていたそうです。

柿岡街道「村上東」の停留所近く。柿岡に向かつて左側に案内板と関東養老の泉の石碑があります。奥に入つて行くと竹林の中に清流の跡らしい地形が広がり、笹の葉にやさしく覆われていた。近くにお住まいの方に湧水口あたりを教えて頂いたけれど残念ながら、湧水はなくやはり笹の葉に覆われシーンと静まりかえっていた。お話によると昭和三十五年位までは湧水は見られていたがその後、心ない人達の廃棄物でゴミの山と化してしまつたそうです。

現在では地区の人達のご努力で整備され、伝説が語りかけてくれそうな風情に引き込まれそうです。位置は龍神山の東南、山麓にあたり、龍神山に降った雨水が地下水となり、湧水したもので、水質が良かったために伝説が生まれたとも言われている。

まだまだ決りとられる龍神山の削堀開始の時期とだんだん枯れてしまつた子は清水の湧水は運命を共にしていると思えてなりません。

小正月には、実家の井戸水（更に十メートル掘り下げ、ポンプ付きで残っている）を味わつてみよう。最近では外国化して飲み水も買つて飲んでいる人が多く、環境の変化で仕方がないのかもしれないが、せつかくふる里に湧き出る良質の命水です。恵みに感謝しなくて何で明日の豊を願う事が出来るでしょうか。

（参考資料・石岡市史（上）、いしおか昭和の肖像）

少し前の事になりますが、私の誕生日に、妹から誘われて梅沢富美男の舞台を観に行ってきた。妹は梅沢富美男の大ファンなのですが、私はどちらかというと熟女の本領を發揮して若者好きなので早乙女太一ファン。

梅沢富美男の舞台は初めて観たのですが、舞台の梅沢さんは美しすぎるといふ表現がピッタリというかそれ以外の表現が出来ませんでした。男性がどうしてこんなに美しく迫力と魅力を持つて女性を演じられるのかと、ただただビックリするしかありませんでした。

外国にも男性が女装した演技はあるのですが、日本の演劇界のような女形という男性が女性を演じるというのはあまり例を見ないのでないかと思えます。

能は面をつけて演じますが、女性の情念を、男性が女性以上に女性らしく演じます。面ですから表情の変化がないはずなのですが、静かな動きの中に凄く迫力の女の表情がつくられます。

歌舞伎は化粧で女性の顔を作りますが、動きや所作は男性なのに女性以上の女性をつくり上げます。日本の古典の舞台はどうして男性だけなのか今度演出家に聞いてみなくては。

私は、万葉集や古今集、新古今集の恋歌を朗読舞に舞いますが、梅沢富美男のように美しく迫力をもって舞っているのか心配になります。演出の先生には、綺麗で、卑猥さのない舞になっていきますよ、と褒められますが、女形俳優のように舞えているのだろうか。

でも、手話を舞いにして表現するのは、今のと

ころは私一人です。私が一番……です。

今年からは、ことば座は第二ステージにステップアップしますから、歌舞伎や大衆演劇の女形にはない、手話の動作言語をベースにした華麗な舞いに仕上げたいと思います。万葉集、古今集、新古今集の他、いろいろな形式の恋を歌う詩の舞は、私の出発点であり、手話言語に翻訳し、自分の解釈によって舞に仕上げる表現は、私に与えられた天職だと思っています。新しいステージでの新しい常世の国の恋物語とその舞表現にご期待頂きたいと思えます。

年頭のご挨拶にかえて……。

### オカリナアートJOY・新春特別寄稿

オカリナアートJOYの野口さん、矢野恵子さんと知り合ってこの春で三年になる。早いものである。本紙は、歴史・文化の再発見と創造を考える、と掲げてはいるが、実際には自分の思う事、考える事を大声に表現する場としての、述志紙であれば良いと個人的には思っている。

小生と野口さんとの接点は、本紙風の会と朗読舞劇団ことば座に関わったことで生まれた出会いである。一つの活動を持つ事によって生まれた必然といえよう。このような出会いこそが本紙に掲げる「歴史・文化の再発見と創造」であろうと思ふ。(白井啓治)

「袖振れ合うも他生の縁」という諺を辞書で引いてみると(行きずりに合うだけの関係でも前世からの因縁である)と書いてある。これを知る前の私は、恥ずかしながら「たしよう」とは多い少ないの「多少」と思い込んでいた。

私の人生も気がつけば半生近くになり、過去を振り返ってみると、この諺の意味も「ふくむ」とうねずける節が多くある。私も含め多くの人達は「不思議な偶然の縁」と簡単に思いがちではあるが、人生を重ね多くの経験をするたびに、単なる偶然ではないことに気づきはじめるのだ。

例えば、私自身が天職だと思っているオカリナ(土笛)作家・演奏家になった時のことを考えてみても、また、生まれた埼玉の地から茨城の行方市に引越したことも、妻と出会ったことも、今まで出会った多くの人達のこと、すべて過去を振り返ってみると、何か関連した縁と感ずるのである。

今住んでいる行方について考えてみても、ずっと昔からそこに住んでいたような居心地の良さがある。それは私の感覚の世界だけではないことが住んだあとにわかった。

それは中世の時代の話しであるが、今私が住んでいるすぐうしろの裏山に館が建っていたようで、その館は市の指定を受けた史跡として登録され、その名が何と「野口館跡」だそう。その館の主が前世の私だったかどうかは検証できないが、何か不思議な感じがする。また私の妻の実家が日光市野口という地名にあり、ここも私の名と一致する。もう一つ不思議なのは今まで私が出会った人

達のことである。それぞれの人達に話しを聞いてみても「私、あなたの知り合いと同じ人知っているよ!」というような、私と共通の知り合いの名前が出てきて驚くことがよくある。それがとてもなく遠く離れた他人同士であったりするとなおさらだ。逆に「何でその人知ってるの?」と驚かれることもよくある。これは前世の縁か、神の意志が、自分自身の意識がたぐり寄せたものなのか…。

「類は友を呼ぶ」という諺があるが、これについては体験上よくわかる。私のまわりにも確かに共通の価値観の人間同士が集まってくる。

要するに縁とは、前世からの縁とそれぞれの持っている意識が介在し合い、それぞれが引き合ったり、離れたりしながら運命が決まって行くのだと思う。すべてが定まった運命では生きていておもしろくない。自分の意志が働いてこそ生きる意味があるのだ。もちろん人間同士のつながりだけではなく、生きていくための環境も一つの縁なくしてはられない。

あるお坊さんがこう言っていた。「人は自分自身では空気も水も作れない。いつも何かに頼って生きていくのだ」と。

自然は大変ありがたい。45億年かけて奇跡的な縁で何かに作られた地球という自然環境、この中で私達が生きていくためには、生態系の頂点にある人間に関わっている。多くなる意志(縁)と私達の前向きな、どう生きるかの意志がこれから生きていく上で大切なのだ。

## 宮崎にて

矢野恵子

二か月ほど前のこと。いしおか補聴器の阿部さんの紹介で、宮崎での演奏の仕事を頂いた。また宮崎に行けるという嬉しさと、体調の不安定な年だったので長距離を移動する不安とで気持ちが揺れ動いていた。

あれこれと考えているうちに出発の二日前となり、ニュースで乗船予定の大阪南港フェリーターミナルである殺人事件の容疑者が拘束された、と流れ大きな衝撃を受けた。

二日後予定通りフェリーに乗船したのですが、その日別のフェリーが太平洋上で横に傾いたまま動けなくなってしまうとのニュースを後日に知った。その夜は確かに天候が悪く、海は大荒れだった。深夜寝ながら「今夜は揺れが激しいな」と思っていたのですが、まさか近くでこのような大事故が起こっていたなんて、ニュースを知ってゾッとしたのでした。

私達は何事もなく無事宮崎に着くと、演奏の前にどうしても行っておきたい場所があり、日南まで車を走らせた。そこは、町おこしのイベントで私達が何度もお世話になった方の家。その方の母さんが三年前に亡くなり、ズツと気にかけていたのでしたが、やっとご仏壇に手を合わせる事が出来たのでした。仕事で訪れる度、その方の家に泊まらせていただき、お母さんの麦味噌やシソ梅干を頂いては、いろいろな話をして楽しい時間を過ごさせていたことは、忘れられない大切な思い出です。

お母さんの仏前に手を合わせると、慌ただしく町おこしイベントの会場の一つであった棚田に向

かった。そこは日南海岸から二十キロ程山に入った、川のせせらぎと鳥の鳴き声しか聞こえてこないのかな場所です。

日本の棚田百選にも選ばれた「坂元棚田」の美しい風景。高さ三メートルを超える石垣が高波のように五十段も重なり、展望台からの眺めは美事と表現するしかない。このような素晴らしい棚田で演奏できたことを忘れずに、またいつかこの場所でも演奏できることを願いながら、日南を後にしたのでした。

次の日、演奏会場である小林市の山間部に位置する「すきむらんど」というレジャー施設に向かった。ステージは、大吊橋と紅葉の一大パノラマをバックにした素晴らしいところに作られてあり、気持ちの良い演奏となった。

今回の仕事で感動したことは、このイベントに呼んで頂いた社長と社員の方々の心のこもったイベント作りの様子でした。社長は自ら総指揮をとり、舞台作りやイルミネーション点灯の準備などてきばき楽しみながら動いておられました。社員千人をかかえる会社の社長のその姿はまさに社員の鏡であり、それを見ている私は何と器の小さな人間なんだろうかと思ってしまう。

このイベントに近隣の住民を招待し、音楽を聴いてもらったり、翌日には社員と家族のために地引網のレクレーションを企画するなど、自分のことよりも相手のことを第一に考える社長の優しさが伝わって感じられました。

帰りのフェリーの中で、宮崎で学んだことを胸に刻み、私自身もお世話になった方々に感謝の気持ち忘れず、また再び皆さんに会えることの願いを波に託したのでした。

## 歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

打田昇三

ふるさとを知ろうと、いしおか補聴器、ことば座、ふるさと風の会が協力して、タイトルに示した催しを始めた。

最初でもあるので、昨年十一月から三回に亘り「国分寺余話」をテーマにしている。付随する歴史座談会で郷土の歴史について市民の皆さんの意見を聞ける…と期待したのだが関心を寄せてくれた人は少なかった。

奈良時代に諸国六十五方国（創建時）に置かれた官立寺院の国分寺は当時の人たちの労苦で建てられながら律令制度の崩壊で衰退し、現在はその遺構さえ満足に残っていないのであるから仕方は無いが、石岡市に置かれた国分僧寺、国分尼寺の遺構は全国唯一の特別史跡に指定されており、石岡市が「歴史の里」とされる所以の一端もそこにあると思われる。「国分寺跡など、どうでも良い」のであれば指定を返上し「歴史の里」を「歴史の要らない里」に変えて貰うべきであるが…

「国分寺余話」では「仏教の伝来」から「日本の王朝と仏教の関わり」そして国分寺を建立させた「聖武天皇と光明皇后（藤原氏）」のことを紹介した。建立の目的は災害、疫病などで混乱した当時の社会を安定させ国家鎮護を願ったものと言われているが、天皇の詔には「先帝の追善、皇族・貴族の極楽行き」が書いてあるそうで、図々しいと言うほかはない。現代の人たちに「どうでも良い」と思われるのも道理ではあるのだが…

国分寺建立に至った本当の理由は機会を見て明らかにするが、歴史ボランティアをされておられ

る「ふるさと “風”」の会の兼平智恵子さんに伺うと、石岡を歴史の里として訪ねて下さる余所の方は熱心に質問などをされるとか、それだけ関心を持つてくださるのであるから、例え悪口になっても国分寺のことをもっと知っていないと石岡市民として恥ずかしいのでは…と知っている。

国分寺だけでは無いが、とかく歴史は表面だけのことしか後世に伝わらない。今回の朗読会と座談会でも、国分寺建立に至る経過に、当時の人間関係で醜い部分や権力闘争の冷酷な場面があるこ

とを参加者には認識して頂いた。虐げられた庶民の苦悩や、恨みを抱いたまま消されていった人物にも触れてやらないと真の歴史にはならない。勝手に手にそのように決めていくからである。綺麗ごとを並べた教科書的歴史には、権力を握った者以外の人間が伝わらないのである。

そういう意味で、これからも国分寺以外に埋もれた歴史を掘り起こすための催しが継続されるように願っているし、多くの皆さんに参加して頂き隠れたお話を伺いたいと願っている。

### 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡2158 6  
☎0299-24-3881

### 歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

1月16日の第3回朗読会は、第1・2回に引き続き、打田昇三作「国分寺余話・第三章：聖武天皇」です。定員10～12名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読会料金（1,000円・・・コーヒーorお茶、お菓子付き）朗読終了後、ふるさと作家打田昇三さん：脚本演出家白井啓治さんを囲んでのお話し会があります。

ふるさとは次の世代に残さねばならない文化と希望の玉手箱

世の中には、『建て前と本音』やら、『表と裏』など、なにがなにやら、さっぱり解らないことが多い。なぜ竹を割ったように単純明快で、すんなりと、物事が進まないのか。思わせぶりな、意味深な物言い。政治家など狐と狸の化し合い。表向きは美しいが、裏を返せば「たくらみ」が潜んでいるなど、単細胞の私は、本当に疲れてしまつた。

その点、科学は単純明快。1+2=3で、それ以外の何物でもない。裏も表もない。シンプル イズ ベスト。綺麗にまとめ上げられた自然科学の法則は、芸術作品にも勝る美学を感じる。勿論科学にも、カオス・ブラックマター・先祖返りなど、数式で明確に説明できない現象もあるにはある。が、大方は、キチンと明快な法則で、分かりやすく説明されている。一点の曇りもない。

それが政治家などは、あまりにも腹芸が多すぎる。かつて、私の身辺に起きた話だが、ある大物会長が『わしも歳だから、この辺で引退しようと思つ』と公の席で発言した。コリヤ大変だ。それを聞いた専務は早速、真に受けて後継者探しを始めた。一時の空白も許されない。ところが大物殿は、周りが真意を読めないのがもどかしい。『先生、そうおっしゃらずに、ぜひ続けてください』と、なぜ遺留の根回しができるんだ！オレの心がわからんのか！このバカヤロウ！ということでも早速、専務はクビになった。大物会長は90歳過ぎても饗饒（かくしゃく）。暗に、そろそろ引退を！...という意味で銅像まで建立し、贈呈されたが何と先生は『ますます頑張ってください』と、激励の意味にとつてしまった。車椅子に支えられて、総会の陣頭指揮をとり続けた。

最近、更にわからないことがある。新内閣の行政刷新会議による「事業仕分け」。資源の少ないフィンランドは、国を興すにはまず教育...と力を入れ、児童の学力はついに世界一になった。未来に焦点を合わせた、賢明の策と言えよう。しかし、我が方の刷新会議は教育費を削り、科学技術関連予算を削る。宇宙望遠鏡「すばる」が観測中断などしたら世界の大損失だ。スーパーコンピュータ、素粒子加速器、深海掘削船など、世界をリードする日本の科学技術を地に落とすつもりか。日本への尊敬は一瞬に吹っ飛び、真理の探求こそ人間の人間たる所以。それをなくしたら文明人とは言えない。人は石垣、人は城。また「無駄方便」という言葉もある。今、直接役に立たないものこそ、未来のために貴重だ。科学技術の何の知識もない仕分け人など、出る幕ではない。バラマキのマニフェストを守るための荒手術なら、集票のための姑息な手段と非難されても仕方なからう。国家存立の根幹を揺るがす蛮行は許されない。万機公論で決すべし。無資源の日本が生き残るためには、科学技術の創造立国しかない。

しかし、今こそ国家存亡の瀬戸際と判断し、この際、徹底してムダを省き財政再建を図ろうとするのなら、中途半端は許されない。そのためには、まず議員が自らの襟を正すこと。「衆議院」「参議院」と、なぜ二つも「院」が必要なのか？なぜ国会議員があんなに沢山必要なのか？高禄を食むタレント議員など恥かしくないのか。あの莫大な国の借金は、一体だれが責任を負うのか。そういうことを国民の前に十分に説明し、まず自分達議員の数をしっかり削減した後、大手術に入つたらよろしい。無血革命など夢のまた夢。汗ではなく自らの血を流すべきだ。政権交代に浮かれて、未来を見失ってはならない。

今、憲法は、不都合な点は多々ある。何か一つを改正しようとしたら、「院」を減らせ！等の話が出てくる。おいそれと改正に手はつけられない。しかし、憲法改正絶対反対の少数政党と連立を組んでいる以上、簡単に改憲もできない。どうすればよいか。前政権が長年にわたり積み上げた巨大な借金。国民の血税を汚れた手でフンドリ合戦。政官癒着。既得権益の死守。族議員の我田引水。そんな議員を選んだ国民の愚かさ……。あゝア頭が痛い。

とにかく政権交代した今こそ、長年の膿をスッパリ洗い流すべき時。軟着陸も重要だが、荒手術も時により許される。そこが腕の見せ所。建前と本音が縦横に錯綜している。あちらを立てればこちらが立たず。表を飾れば裏は火の車。国家百年の計をしつかり見据え、野党も対岸の火事・お手並み拝見などと責任逃れをせず、祖国再建内閣だ！何とか皆で力を合わせ、この難局を乗り切ってほしい。

さて前置きが長くなりすぎたが、仏教などで、清廉を重んじる「精進料理」は、大変聞こえはいいが、あれは一体何事なのか？実はあの清楚な感じの精進料理にも、昔はドロドロの「たくらみ」があったらしい。それは肉食を禁じることに、仏徒に精力をつけさせないための、高僧の戦略だといわれる。高僧は多くの門弟や檀家などを統括しなければならぬ。仏教の清廉を旨とする教えに反し、若い門弟などが肉食を多くとれば、精力「勢力」が付き、我儘を押し通そうとする。檀家なども高い税（お布施）に対し、寺に反逆する者が出てくる。それを未然に防ぐため、寺や公家や幕府は、仏教を広め、仏の教えとして肉食を制限した。武装蜂起や一揆を防ぐため、民衆のエネルギーを未然にそぎ落とす為、修行の名を借り、精進料理を推進したのだという。

織田信長は、民生の安寧を祈願すべき立場の天台宗総本山が、敵対する朝倉義景・浅井長政ら武將と組み、更に「のさばり過ぎ」に腹を立て、1571年、比叡山延暦寺を焼き討ちにし、4000人ともいわれる僧俗男女を殺害した。中立公平であるべき仏教が、一部の武將と手を組み、衣の下に鎧が見え隠れすることに、我慢できなかったたのである。

【信長は、うつけだ、粗暴だと評されたが、似たような御仁は、その辺にいくらでも。近年の国会風景を見ると、これが選良のなすことかと腹が立つ。気に入らなければ審議に応じない。欠席だ。与野党入れ替わっても同じ愚を繰り返す。国会に出席しないのなら、議員の義務を果たしていない。即、辞職すべきだ。論点は、堂々と論戦の上、己の正当性を天下に詳らかにしたらよい。欠席で抵抗するなど、真の民主主義が育っていない証拠。国民が真に必要なを感じて、血を流して勝ち取った貴重な民主主義なら、こんな野蛮な行動は取れるはずがない。根が浅すぎる。戦争に負けてただでもらった民主主義だから、その真の有難さを知らない。民主主義をきき違え、更に自由主義をはき違え、己の勝手気ままを押し通す。マッカーサー元帥が今ここに現れたら、日本人は、あれからチツトモ成長していない。13歳のままではないかと、再び嘆くに違いない。】

話はそれてしまったが、そもそも昔の寺院は一般庶民の安寧を願って、即ち、底辺からの要望により、建立されたものではない。最高権力者の安寧繁栄を願って、庶民に税を課し、労力提供を強制し、資材・物資を無理やり供出させて造営されたものといわれる。権力者により編纂された歴史書には、当然そんなことは載っていない。都合なものは歴史書に載るわけがない。それゆえ、一般的な庶民の、

家内安全・商売繁盛・合格祈願などは、時代も下り、ごくごく近年になってやっと執り行われるようになったのだ。しかも商業主義に巧みに便乗した事例が多いように思われる。しかし庶民は、それを納得済みだ。宗教心はなくとも、宗教慣行には無心に従う。私も、「初詣」など、欠かしたことはない。

さて、徳川5代将軍綱吉は、犬公方となじられたが、「生類憐みの令」は、決して動物愛護の精神などではなかった。表向きとは裏腹に、畜産物などで、領民が栄養を蓄え、エネルギーを爆発させないための深慮遠謀であったともいわれる。綱吉自身は決してバカ殿様ではなかった。湯島に聖堂を建立するなど学問を好み、後世「天和(てんな)の治」とさえ称された。柳沢吉保ら側近政治の弊害により、人民は苦しまされ、殿は憎まれるハメとなった。

しかし誰がどんなに抑制しようが、美味いものは庶民が求めてやまない。牛乳を濃縮精製して得たこの世で最もおいしいもの・これを「醍醐」(チーズ)と言い、その味を「醍醐味」という。日本は農耕民族。畜産は仏教の理念に反するとして、食用用としての畜産は行われなかった。などと教科書には書いてあるが、奈良時代から薬用栄養剤としても、チーズは多用されていた。そして、今から7000年前の縄文中期、福井県の鳥浜貝塚からは、稲の花粉が泥炭層から、同じく猪の骨が大量に発掘されている。又、古墳時代(6世紀ころ)の遺跡からは、豚や牛の骨が大量に発掘されている。畜産があつたからこそ、日本人は、西洋の文化に追いつけ・追い越せのエネルギー源となり、明治維新や敗戦後の速やかな復旧の原動力となった。戦後、日本人の身長が伸びたのも、畜産物による良質のタンパク質のおかげといわれる。それゆえ、稲作は弥生時代からと、食

肉用畜産は近年になってから…などの定説は、全く怪しい。日本の為政者は、自分の安全のために、仏教をつまぐ利用したのではないかと私は思う。

一方、イスラム教では、豚肉を食することはタブーとされている。長年それはなぜなのかと疑問に思ってきたが、最近ある書に、その所感が載っていた。即ち、イスラム民族は、そもそもは遊牧民である。

遊牧民のリーダーは、群れを統率し、季節の変動に合わせて、適所に適所へ群れを誘導しなければならぬ。牛や馬、羊・山羊・ラクダなどは、かなり人の言つことを聞く。遊牧に最適の動物だ。しかし、食糧資源として非常に優れた家畜である豚だけは、どんな手を打とうが、人の言つことを聞かない。群れの先頭が南を向いても、他はそれに従わず、北へ走るもの、東西に散るもの、全く統制がとれない。豚を飼育した人なら、それがよく分かる。いわゆる、トン走だ。これでは効率よく群れの移動など、できはしない。ならば、豚は遊牧民として、飼育を断念するほかない。そこで頭のよい開祖ムハンマド(マホメット)は考えた。イスラム教徒は、豚肉を食べてはいけない。コーランにそう書き加え、聖典に書いてあることは、絶対に守らなければならない。マホメット没後1400年近くを経て今日なお、この掟は、同教徒の間で厳格に守られている。

【また、トン狂な珍化論雑学。皆さん、人類の祖先を深く考えたことありますか？ 私もそうだったが、せいぜい類人猿停まり。チンパンジーと枝分かれし、直立二足歩行を始めて、「ヒト」となる。それぐらいしか考えたことはなかった。無理してもう少し先に遡っても、「霊長類」即ち「サル目」までで、両眼視でき、大脳が発達し、指には扁爪(ひらつめ)が生えており、物を掴むのに適する。昼行性のサル

類。この程度までしか考えたことはなかった。

しかしその前は?…と例によって、ゴンボ掘りが始まる。すると辿り着くのは、霊長類の前。即ち、「原始哺乳類」の誕生は?…といつことになる。魚類から両生類へと進化して、脊椎動物が初めて陸上に進出するのは、今から3・6億年前。そして、両生類は爬虫類へと進化する。爬虫類は空気を呼吸し、変温性で卵生または卵胎生。ワニなど6000種もあり全盛時代を迎える。こ存じ爬虫類の代表・恐竜は中生代に大繁栄したが、今から6500万年前、中米ユカタン半島に直径10kmの小惑星が衝突し、煤煙で太陽光が遮断され、多くの植物が枯れ果て、恐竜も一斉に地球上から姿を消す。

さてその恐竜全盛時代に、今から2億年前、ハツカネズミ大の「モルガヌドドン」という温血の哺乳類の元祖が誕生した。恐竜の陰で怯えるように生きていたが、他人の不幸のおかげで、という変だが、恐竜絶滅のおかげで、ぼっかり空いた領域に、哺乳類は大繁栄を迎える。哺乳類はサル目・ネコ目など30種ほど繁栄した中で、これという特殊な能力の持ち主でもなかった、いわゆるマイナーな種として、「食虫目」(ハリネズミ・モグラなど)という、昆虫やミミズなどを主食とする一群が現れる。嗅覚は発達していたが、視力など極めて弱く、敏捷なわけでもない食虫目だが、その中に「モグラ科」が存在する。そしてその枝分かれとして、わが霊長類が生まれる。従って我々の遠い先祖はモグラの一族であった。その証拠として人間とモグラにのみ、「処女膜」が存在する。日本には6種類のモグラが生存している。モグラは「日光に当たると死ぬ」と言い古されてきたが、これは迷信。体温が下がると、地上に出てきて、わざわざ日光浴をして、体温を上げる。」

さて今回は、別にモグラをステージに登場させるのが目的ではない。狙いは、モグラなど食虫目から、我々霊長類とともに枝分かれした「偶蹄類」の中の「ブタ」なのである。マホメット様さえ手をやいたこの得体の知れない怪物。大同に和することなく、小異を賣く。好奇心はやたら強く、いたずら好き。自己主張が強く思った方向に進退する。勿論その先祖であるイノシシは、古来より猪突猛進により、猟師を震え上がらせた。向こう見ずに一直線に突っ走る。意地っ張りて妥協を許さない。日頃、序列闘争は激烈。食欲は真に旺盛で、雑食性。結構悪食。限りない食欲で、メタボなど気にしない。そして恐るべき繁殖力。むやみやたら子を産む。……?……?ここまで豚の特徴を並べ立てたら、勘の良い人は、チョットマッテ! それは、もしかして、人間のこと言つてんじゃないの?

その通り。御明察! 人と豚は真に似通っている。私は、今は食肉衛生検査を業務としている。人畜共通伝染病など感染がないか、毎日、何百頭もの豚を一頭ごとに厳密に検査をしている。食の安全の守護神のつもりで。内臓など調べると、ヒトの臓器に実によく似ている。心臓外科医はブタの心臓を使って、新進医師に手術手技を指導する。その他、医学用実験動物としてミニブタが多用されている。余談だが、雄を欲しくて気が狂っているメスブタ(これを獣医学では、思壮狂 しぼぎょう という)の卵巣は、(正常は小指頭大)大人の握りこぶし大に膨らんでいる。発情ホルモン過剰分泌。いわゆる卵胞嚢腫だ。そついうわけで、解剖学的にも、生理学的にも、そして、性格や行動も、ヒトとブタは実に似通っている。人間の「人でなし」行為の根源は、以前にも書いたが、野生を引きずって今なお健在というか、

腐れ縁というか、悲しい宿命を負って生きている。食欲や性欲の強さは、大変、人間を高貴な生物と信じたいたろうが、根本的には、野生の動物たちと殆ど変るところが無い。まかり間違えば、人はチンパンジーに飼われる食用家畜であった可能性もありうる。ヒトの乱れに対し、むしろ動物の方がきつい掟を厳格に守り、秩序が保たれている例が、多々ある。それゆえ、豚を軽蔑することは、即、人間を蔑むことと同じ。豚と人類はあまり遠くない親戚のようなもの。人類のために、尊い命を、犠牲にされている動物達にも、一寸の魂があることを忘れないでほしい。互いの命に貴賤はない。獰猛な人類も、「たくらみ」など邪心を捨て、時には「仏心」を呼び覚まし、自然界の成り立ちを、深く考えてほしい。

## ギター文化館

### 2010 CONCERT SERIES

今年はギター文化館が開設して18年になります。本年も魅力いっぱいコンサート・シリーズを予定しております。御期待下さい。

- 1月24日(日) PM3:00~北口功ギターリサイタル
- 1月27日(水) PM6:00~桑山哲也LIVE
- 2月21日(日) PM2:30~鈴木大輔ギターリサイタル
- 3月21日(日) PM3:00~吉川次郎ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

幻か、現だったのか

伊東弓子

時々、一寸前の時代に生きている様な思いになる事がある。異常なのかな、現実から逃避している、夢を追っているだけか、私は自問自答したりしている。

十一月の前半私はそういう時間を楽しんだが結局は空しかった出来事があった。珍しく暖かな午後用事を足す為に出かけた。自分だけの一時を満喫していた。鼻歌を歌い周囲の景色を目にしながら頭の中には一寸前の時代の事が浮かんでいた。野良の仕事は一段落し、山や漁の仕事に移る頃だったろう。風も冷たくなり、木の実も紅葉も風景から姿を消していく季節、空気がきれいになって夕焼けや月の輝きは一層美しさを増していただろう。生活する人々の往来ももつとこの地域中心だったろう。等考えて走り続けていた。

「オー。こつちへこうよ。柿食べてけよ」

という。この辺に知っている人はいない筈だ。手招きしている人に引かれる様に寄っていた。畑は一面背の低い枯草で覆われ一本ある柿の元に足を投げ出して座っていた。

「木に登って柿を取れよ。いっぱい取れよ。そいで食べる」

どこの誰とも知らない私に何で、とも思ったがあまり深くは思わないことにした。たいして高くもない木で四方にのびた枝がある。簡単に登れそつだ。でもちよつと憚る気もするがその人の意に添う様に登りだした。三ツ四ツ取った。

「もつと取れ、いっぱい取れ。どうせ鳥のやつらがつついちゃうんだから」

とは言ってくれるが、これから行く先もあるし、

遠慮した。その一つを一緒に食べる事にした。

「服で拭いて大丈夫だから」

しゅっしゅつと擦り齧った。こういう食べ方も久しぶりだった。切って一口づつ食べていたのと違う味を感じた。

「もつと食べる、ゆっくりしてけよ」

と何度も言う言葉に急ぐ用でもない。まあいかと往生してこの人に合わせる事にした。きつと話し相手が欲しいんだろつと思つたからだ。案の定身の上話しが始まった。姑も旦那も息子も先立つて今一人ぼつちだから踏ん張つて生きているんだという。私の周りにも同じ様な境遇の人はいる。特別視しないけど何故か話しに入り込んでいる自分に気がついた。もう用事の事はどうでもよくなつてしまった。

午後の陽は変わらず暖かかった。草の上に横になつてみたい気もする。畑の外れに白い菊がお辞儀をしているかの様に咲いている。

「俺は今日はな、柿と菊を取りに来たんだ。十夜講に上げんのにな」

「十夜講」と聞いて胸が騒いだ。今でも行われているんだ。是非聞いてみたい。出来れば行ってみたい。という心を知っているかの様に、

「そつだ。おめえもこうよ。楽しいど。もうすぐだかんな」

私の方からいろいろ聞きたいが、その隙がない。話しはどんどん続く。坊さんが来る事、女達は十人位だという。いつのまにか一人一人の紹介にまでなつた。

たつつあんは自慢話の好きな人だ。家の事、親戚の事、話しがいつべえあんだ。

よねちゃんは愚痴つてばかり言ってるけど、暗

え顔はしてねえんだよ。

ちいちゃんは何があつと采配振つて大声で話す人だ。

人の話し聞こうとしねえで、必ず否定する婆さんがいんだ。いやな気分だけど仕様がねえな。

何を言われても聞き入れる人もいる。たつつあんは利口もんだ。心が広いんだなあ。

ちよつと出た話にも「そつだ」「こつだ」「こつした方がいい」と話をもつていくとみさん、あんな風に出来たらしいと思つけどな。

俺は黙っている方が多いな「うん」と頷いているばかりだよ。わかんねえ事はかりだし、喋り出す勇気がねえ、情けねえよな。

そつだみつちゃんは泣きだすんだよ。この世の中で自分が一番惨めなんだつてな。そんな事言つたつて誰も助けてくれねえよ。

背筋のばして高目でみんなを見上げるように聞いている人もいつと。つまんねえ口は出さねえ人だ。

寅さんは話し上手だ。必ず相手のいいところを見て言つてくれんだわ。

おつかつあんははつきりものを言う人だ。なおした方がいいとこなど言われて「むっつ」とすつけど後で考えると納得すんだよな。すごい人だわな。

いろんな人がいつけどいい人だとか悪い人だとか決められねえ。嫁に来た時からここで苦労して来た仲間だからな。一緒にいて一緒にやる事がいいんだ。それに年老いた坊さんが来てくれて世の中の事、お経の中の話聞くのも有難い一つだ。きつとこつな。あと三日だど、俺はそろそろ帰つたらな、とつて坂を降りていつてしまった。自分

本意な人だと思つたのも正直な気持ちだつた。

十夜講の行われる旧十月十三日の夜、あの人が  
ら教わつたとおりに畑から坂をおりた。十三夜の  
月は明るかつた。遠くの方を雲がゆつくり流れて  
いた。時間からしても誰かに合つてもいい様に思  
つたが人影はない。動かない景色。不安も募らせ  
てくる様だ。谷津田も通つた。山を背負っている  
畑の近くにある寮に辿り着いたが灯もない。人気  
は勿論ない。時間や場所間違えたかな。何だつた  
んだらう。縁に腰をかけて待つことにした。でも  
ひとつも変わつた事もなかつた。悲しくなつてき  
た。遠くの木々が田に黒々と影を落としている。  
その木々を見ながら待つだけだ。鳴く虫もない。  
鳥の声もない。車の音など聞こえてこない。待  
つても変化はおきなかつた。場所が変更になつた  
か、老いた坊さんの為に寺に集まつたか、夜は寒  
いから昼間したか、それとも今夜ではなかつたか、  
メモでもないかと寮の入口の棧を見たりポストを  
覗いてみた。月は何と思つているかと思上げてみ  
た。答えてくれる訳もない。長い自分の影が私の  
足元からついているだけだ。一品持ち寄りとい  
う話だったので煮豆を用意して来た。それを縁に座  
つて食べた。一人で口にする侘しさから疑問が湧  
いてくる。あの人と合つたのは？ 今夜の十夜講  
というのは？ 何だつたんだらう。

一粒一粒口にしながら故郷のあるお爺さんの四  
ツか五ツの頃（昭和の初めの頃）の話しを思つて  
いた。取り入れも終ると部落は忙しくなつたとい  
う。尼寺跡の傍にある寮に婆さん達が七日間寝泊  
まりする為に若衆達は各家から布団集めをするの  
だそつだ。担いで来る人、荷車に乗せてくる兄ち  
ゃん、抱えたりと様々だつた。その後は米や銭、

薪だの野菜いろいろ集められた。婆さん達七日間  
の食い扶だつた。一家の中でも年老いた婆さんが  
集まつた。皆が「じいやこつ、じいやこつ」と言  
いながら念仏講の用意をしてたんだ。大抵の婆さ  
ん等は爺さんを亡くしていたから、念仏唱えなが  
ら「爺さんが恋しい、爺さんが恋しい」と言つて  
いたんだと思つていたという。鐘の音、木魚の響  
きが一日続いていた。念仏の終りの日には大きな  
釜でけんちん汁を作る。子供等もつろつろと見に  
行くと汁を貰える。それが楽しみだつた。坊さん  
は来ていながつたと思つたが覚えがねえという。終  
ると又若衆等が部落中走りまわつて返しに行く。  
片付いた後は木の葉を燃やした煙が細く高くのび  
ていたと話してくれた。

父から聞いた十夜講の話も大正中頃の事だ。  
隣り部落のお婆さんが「十夜講の終りの日にはけ  
んちん汁ご馳走するからこい」と言つていた。講  
の内容は知らなかつた。

私の経験も子供達と「お十夜」の歌を唱い、勤  
労感謝の日と噛み合わせて行つた程度で、深く調  
べた訳でもないし、聞き歩きした訳でもない。あ  
の人をおして現代の生活に残つていた喜び、そ  
れに浮かれてここまで来たが、本当はどうだつた  
のだらう。現実と想像の入り乱れた十夜講にどっ  
ぷりつかつてみたかつたが、夢から覚めて空しか  
つた。夜道を帰る足は重く哀れな私がいだ。

あの女の人と合つた畑を通つた時、又合える事  
を願つて過ぎた。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

常陸の国に深い所縁を持つ平氏の祖先は第五十代の桓武天皇であるが、その父親の光仁天皇は現代に置きかえると、定年を過ぎてから藤原氏などの政治的な思惑に依って成りたくも無い天皇にさせられた気の毒なお方である。しかし、この天皇の即位により神話の世界ではない天皇の系統が十代ぶりで創設者の天智系に戻ることとなった。

天智天皇こと中大兄皇子が藤原鎌足と共に謀してクーデターを起こし当時の蘇我王朝から奪った皇位は一代限りで大海女皇子に横取りされていた。天智天皇には大友皇子と言つ頭脳明晰な息子があり「天孫降臨」の相続制度から言えば当然、この皇子が即位すべきのだが、天智天皇死後の権力闘争に敗れてその存在を消され、何と千二百年もの長い間、皇統からも削られていた。

水戸光圀らの努力で、大友皇子が「弘文(こうぶん)天皇」としてやっと登録されたのは明治三年である。勿論、本人は知らない。弘文天皇を討ち滅ぼして天智天皇の後継者となり天武天皇として即位したのが弟の大海女皇子であり、いわゆる「壬申の乱(じんしんのらん)」では伊勢地方や熱田地方の豪族たちの協力が有ったから大友皇子の軍隊に勝ち、皇位を奪うことが出来たのである。

伊勢神宮や熱田神宮が天皇家の崇拝を受けるようになったのはその時点からであろうけれども、本来ならば皇統が天智系(光仁系)に戻った時点で敵に協力した氏神も変えなくてはいけなかった筈なのだが、手頃な神様が居なかったか、或いは後で述べる藤原氏の思惑に配慮して光仁天皇や桓武天皇もそれを言い出せなかったか、ともかく皇

室の矛盾した祭祀が今も続いていることになる。

光仁天皇は、万葉歌人としても知られた志貴皇子の子で「白壁王(しらかべのおおきみ)」と呼ばれた。母親は紀氏の姫とされている。聖武天皇より八歳ほど年下であるから皇位継承の騒ぎに巻き込まれる恐れがあり、場合によっては消される心配もあった。安全の為に目立たず平凡に、アル中のイメージを作ったり、時には行方をくらましたりして天武系の疑惑の目を逸らせ、生き抜いた。

その点では父親の志貴皇子も同じだったと思われるけれども、この人は母親が身分の低い出であること、天智天皇の六番目か七番目の男児で最初から皇位継承の対象になっていなかったために無事でいられた。天智天皇の相棒だった藤原鎌足の遺児・藤原不比等(ふひと)は、壬申の乱における大海女皇子(天武天皇)側の勝利により、敗者の天智系に連なる主要人物としてA級戦犯に指定されるところ未成年だったので少年法を適用されて助かった。数え切れないほど多く抱えていた天武天皇の側室の中に氷上娘(ひがみのいらつめ)と五百重娘(いおえのいらつめ)という二人の姉が居たことも助かる要因であったかも知れない。

天武天皇が十数年で他界した後の皇位は持統天皇(天武皇后)そして元明天皇(天武皇太子草壁皇子の妃)と、いずれも天智皇女が継承し、さらに元明天皇を母とする文武天皇などに伝わってゆくから藤原不比等も戦犯の家系を気にせず仕事が出来ようになる。能吏の不比等は女帝に頼りにされ幼い天皇の役にも立って、やがて娘の宮子を文武天皇の夫人(ぶにん 皇后の代理)に入れ、光明子を聖武帝の皇后に据えることに成功した。

藤原不比等の密かな願望は父の鎌足が天智天皇

と協力して築いた日本の天皇制を天武天皇系から元の形の天智天皇系に戻すことであつたのだが、皇室と藤原氏の密接な関係が出来上がつてくると別に天智系でなくても藤原氏が権力の座に居られれば良いと思うようになっていた。そのため自分の家系に取り込んだ天武系についても「皇統を奪つた」とせずに「日本書紀」などを書き変えて天智系の正当な後継王朝にしたと考えられている。

それならば壬申の乱で弘文天皇を蹴散らした伊勢の神なども皇室の守護神で居られることになる。

諸国に国分寺・国分尼寺を建立させた聖武天皇は不比等の孫である。生まれた時からの即位が約束されていたが、回りには**天武天皇系皇族**が何人も居て藤原氏を牽制するため「未だ即位は早い」と言われ天皇になれたのは二十三歳の時である。近年に壮大な邸宅跡から木簡などが見つかり当時の権勢が偲ばれる長屋王(ながやのおおきみ)・天武天皇の孫 やがて謀反の罪で除かれる)など、うるさい輩いめらを抑えるためにも、聖武天皇には早く皇太子とする男児が欲しい。即位三年目によつやく皇子・基王(もとのおおきみ)が誕生したのだが僅か二歳で亡くなってしまった。

儒教を信奉していたとされる聖武天皇も、熱心な仏教信者であつた光明皇后こと安宿媛(あすかべひめ)の影響から幼い基王の死を契機に仏教に宗旨変えをしたのである。諸国には基王の冥福を祈る目的で六四〇巻の金光明経(こんこうみやうきよ)が配られた。これが後に唐の国の真似をした**国分寺建立**に繋がるのだが、同時に諸国の国府には皇子誕生を祈願するよつに命令が出されたものと推定される。

不比等の三男・藤原宇合(ふじわらのうまかい)

は数年前まで常陸国府（石岡）に勤務していて、その頃は都で現在の法務大臣のような要職に就いていた。OBとして顔が利くから常陸国府に手紙を送り、特に皇子誕生を祈願するよう国司に要望したであろう。常陸国府では点数を稼ぐチャンスとばかりに役所構内の一画に八幡宮を建立した。現存する若宮八幡宮は祭神が安産・子育ての神であるからその時に建立された神社であろう。実は聖武天皇の子には基王と同じ頃に生まれた安積親王（あさかしんのう）が居たのだが、藤原氏の血統ではなかったから皇太子に立てられることもなく十七歳で没した。藤原氏による暗殺説がある。

願いは空しく聖武天皇と光明皇后の間には基王の後に男児を授かることが無かった。そこで天武系皇統存続と藤原氏権力維持のために、基王の姉である阿倍内親王（あへないしんのう）が史上初の女性皇太子に立てられ、聖武天皇崩御の二年前から第四十六代・孝謙天皇として即位した。

この女帝は母親である光明皇太后の後見を受ける形で政治を行ったから、従兄弟である藤原仲麻呂（不比等の嫡男・武智麻呂の子）を重く用いて専横を許したり、称徳天皇として重祚し弓削道鏡との艶聞が「日本霊異記」で伝えられたりして評判は良くない。称徳天皇が道鏡に皇位を譲ろうとして宇佐八幡宮の神託を伺ったところ、使者となった和氣清麻呂が「ノー」という返事を持ち帰り天皇の思惑を断ち切った話は戦時中の美談となり戦後も形を変えて歴史書に記載されている。果たしてそうなのか：近年の研究では弓削道鏡の身分について実は光仁天皇（桓武天皇の父）と同じく志貴皇子の子であったとする説がある。

聖武天皇は、娘の孝謙天皇が独身のため皇位継

承が混乱することを心配して息を引き取る間際に「…道祖王（ふなどのおうきみ）を立てるように…」言い残していたとされる。天武天皇の孫に当る人物で、父親は天武天皇系長老として藤原一族と共に政界で活躍していた新田部（にたべ）親王である。孝謙天皇は聖武天皇の遺言どおり、道祖王を後継者に指定しようとしたのだが、このお氣楽男は聖武天皇の喪中に宮中の女官に手を出し、さらに朝廷の秘密事項を漏らす事件が明るみに出してしまった。当然、後継者の話はお流れになる。

天武天皇の子孫は他にも数え切れないほど居たから重臣たちがあれこれ掻き集めて推薦したけれども孝謙天皇は、藤原仲麻呂が後見していた「大炊王（おおいのおおきみ）」を選んだ。

藤原不比等と共に「日本書紀」を編纂したのは天武皇子の舎人（とねり）親王であるが、大炊王は舎人親王の晩年の子であり「特に悪いところが無い」と言う理由で孝謙天皇から皇位を譲られ、第四十七代の淳仁天皇になった。確かに悪いところが無かったけれども、この人は藤原仲麻呂の息子の未亡人を妻にしている、六年ほどの治政も自分の意思は殆ど通じず仲麻呂が勝手に決めていたと思われる。仲麻呂に利用されたのである。光明皇太后が亡くなり、孝謙天皇が独自の政策を主張するようになる。孝謙天皇が独自の政策を主張するようになると恵美押勝（えみのおしかつ）という名前を貰うほど信任された仲麻呂と孝謙天皇との間に何となく隙間風が立つようになる。

一旦は皇位を譲り太上天皇（上皇）として君臨していた孝謙天皇は、毒にも薬にもならない淳仁天皇と猛毒の恵美押勝に愛想を尽かして、新たな皇位継承者となる人物を模索した。そこで注目されたのが天智系唯一の生き残り志貴皇子の遺児で

ある。後に桓武天皇が出た、と言うよりも現代まで続く天皇の家系は志貴皇子に発している。弓削道鏡は志貴皇子の晩年の子で、母親の身分が低かったのと天武系の追及を防ぐためとで弓削氏の養子になり早くから僧侶として修業していたと言われる。弓削道鏡を皇族出身とする説は平安時代から多くの記録に残されていた。皇室関係の系図にも載り、明治以降は何人かの学者によって考証されていて近年は説を支持する研究者が多い。

その頃は、藤原不比等の四人の子が南家、北家、式家、京家として公家社会に定着し藤原氏がはびこり始めた時代であるから、伝わる歴史も為政者の都合の良いように捏造されている。道鏡は天皇の地位を狙った極悪人のように言われているが、隣の小美玉市には「道鏡の墓」が存在するようなので茨城県人としては新説を支持したい。

孝謙上皇は、密かに弓削道鏡を探させて自分の身近に置き人物を見極めようとしていたのだが、体調を崩していたため道鏡が加持祈祷で直した。医療制度も健康保険も無い時代のこと、お経で治らない病気は諦めるしかない。孝謙上皇の病は精神的なものであったから、幸いに道鏡のヘタなお経でも少し回復したのである。感激した女帝は、僧侶として優れており自分の病氣も治してくれた弓削道鏡を皇位に就けようと考えようになる。それでは困る連中が、二人の関係を三流週刊誌並みにスキャンダラスに騒ぎ立てた。

確かに、僧籍に在る道鏡が天皇になることは、それだけでなくも出しゃばり始めた仏教を増長させることにもなるから藤原一族を中心に官僚たちが先ず反対した。国分寺建立でも分かるように仏教の隆盛は地方で税を取られる国民に大きな負担を

強いていた。噂を聞いた日本中の人々が世論調査で孝謙上皇の構想に反対したと思われる。

権力者の恵美押勝（藤原仲麻呂）は、自分の立場が奪われる心配もあるから孝謙上皇に苦言を呈上しようとしたのだが「猫の首に鈴をつける」役目は損だと気づいて、自分では言わずに淳仁天皇を通して「弓削道鏡と縁を切るように」孝謙上皇へ申し入れたのである。当たり前ながら上皇は化け猫のような凄惨な顔になって怒った。当時、上皇は琵琶湖の南端、石山寺近くの保良離宮に居たのだが直ちに奈良の都へ戻り、身の潔白を主張するため法華寺へ行って髪を下ろし法基と号した。

法華寺は諸国国府に置かれた国分尼寺の総本山であり、光明皇后が藤原不比等の邸宅を移して創建したと言われる。孝謙法皇は、生意気な（本当は気の毒な）淳仁天皇に対して「以後、天皇は小事のみを行つべし、国家の大事と賞罰は法皇自らが行つべし」と宣告した。つまり天皇の実権が剥奪され下級公務員並みになったのである。自分の立場が招き猫のようなものだと思つた天皇は半ば諦めていたのだが、背後で操つていた恵美押勝は大物政治家が選挙に負けた以上に驚いて孝謙法皇と対決する姿勢を明らかにした。

国分寺建立の詔が出されてから二十数年を経た天平寶字八年（七六四）の秋、太政大臣の地位に在った恵美押勝と藤原仲麻呂は、法皇を欺き太政官の印と天皇の御璽を以て近隣諸国の兵を召集することにした。軍事訓練と称して集められた大軍により都に至る関所を塞ぐ計画である。これは孝謙法皇と弓削道鏡を襲撃する目的であつたとされている。この時に太政官の中級官僚で文書課長のような職に居た高丘比良麻呂という男が、押勝

に書かされた召集令状の人員数が異常に多いことに気付く。「…実は…」と法皇の御所へ駆け込んだため謀反が発覚してしまった。朝廷側では直ちに追討の軍勢を整えて宇治から近江にかけて戦い、恵美押勝一味を滅ぼした。この時に活躍したのが軍事部門の下級将校であつた坂上笠田麻呂と言つた人物であり、後に息子は父親の跡を継いで征服のお先棒を担ぐ將軍・坂上田村麻呂になる。

藤原仲麻呂に担ぎ出されて皇位に即いた淳仁天皇は、この陰謀に積極的に加担した訳では無いが、傍目には一心同体と思われる立場である。今回の陰謀に悪用された召集令状に天皇の御璽が押されており、また押勝に押し付けられて孝謙上皇の逆鱗に触れた。「押」の字が三つも重なっては幾ら私は無実だ！」と叫んでも罪を押し付けられる運命にある。捕らえられて淡路島へ流されたあと脱走を試みて殺害されたと思われる。そのため「淡路廢帝」と言つてゴミのような名で呼ばれる。

天皇が居なくなつたので、事件が収まつた十月に孝謙法皇は髪を伸ばし称徳天皇として重祚（ちようそ）再び皇位に就く。年号が「天平神護」と改められ、弓削道鏡は太政大臣禅師の位を授けられた。左（右）大臣には北家藤原氏の永手が起用された。討たれた仲麻呂の従兄弟である。称徳天皇の治世は凡そ五年であるが、多分、健康状態は良くなかつた。そこで伊勢神宮に大仏を建てさせたり、百万基の塔を造らせて各地の寺院に分け与えたり、高僧に位を授けたり仏教重視の施策が記録されている。女帝はその頃に皇位を道鏡に譲る決心をしたと思われる。

称徳天皇は重祚三年目の夏に気分晴らしと縁起担ぎで年号を「神護景雲」と変えた。しかし雲は

増えたかも知れないが、宗教で病気は治せない。元氣になつたのは弓削道鏡と仏教界だけである。神護景雲三年の夏に、公家たちを驚かさず知らせが九州からもたらされた。太宰府の神官が宇佐八幡宮の神託と称して「弓削道鏡を皇位に即ければ天下が太平になる」と奏上してきたのである。善意的に考えれば病氣勝ちな天皇を元氣付けようとした冗談とも受け取れるが、国家の一大事になる。

宇佐八幡宮は何万社もある八幡社の總本宮で神仏混淆時代には奈良・東大寺などを傘下に置く有力な宗教団体であつた。大和朝廷の先祖が朝鮮半島から逃げて来た際に最初の定着地となつたのが宇佐であり、心神王朝の故地でもあるから朝廷の厚い信仰を受けていた。その托宣は重要である。称徳天皇が世上で噂されるように道鏡に溺れていたならばその場で皇位を譲つたことであろうけれども天皇は慎重に対処した。確認のために人物を選んで宇佐八幡宮の神託を再度伺わせた。

選ばれたのが和氣清麻呂（わけのきよまる）である。中堅の公家で、恵美押勝の乱に活躍した。何よりも姉の法均尼（ほづきんに）と妹の明基が称徳女帝の側近として仕えていたから、一番に信頼の出来る人物だつた。当時、清麻呂は神経痛が何かで脚が痛く、歩くことが出来なかつたために輿に乗つて九州まで行つた。歩けないほどの病氣なら断れば良いのに行つたのは、それだけでも話に裏があると分かる。出発を前にした清麻呂には各方面から圧力がかつた。弓削道鏡の仏法の師である人物は「もし仏弟子の道鏡が天皇になつたとすれば、自分は何の面目で臣下になることが出来ようか？」と言ひ、政府からも「アメとムチ」の見本が送られてきた。テレビのワイド番組や週

刊誌なども「清麻呂どつする！」と騒いだ。

九月半ばに戻った和氣清麻呂は姉の法均尼を通じて宇佐八幡宮の神託を称徳天皇に奏上した。その内容は左大臣の藤原永手から指示されていた通り「…天皇の地位は必ず明らかな皇統の者を立てるべきであり臣下を君主とした例がない。天位を望む無道の臣は速やかに誅すべし…」という神様にしては過激な内容であった。こうして称徳天皇が白羽の矢を立てた皇位継承の候補者が消された。この出来事は称徳天皇の寿命を縮めることになり一年も立たず波乱の生涯を五十三歳で終わらせた。弓削道鏡は程なく追放されて下野国へ流された。伝えられるデマのように女帝を騙して皇位を奪おうとした反逆者ならば命は無かった筈である。

周りが敵ばかりだと気づいた女帝は、せめてもの腹いせに弓削道鏡の故郷へ遊びに出かけて具合が悪くなり、後継者を指名せず息を引き取ったから政府関係者は慌てた。当時の実力者は左大臣の藤原永手、右大臣の吉備真備（きびのまきび）、内大臣の藤原良継（宇合の子）であり、拾い集めた天皇候補者の名簿を前に、何度か協議を進めたが意見が合わなかった。道祖王や大炊王や弓削道鏡で懲りているから、自分たちの将来も考えて人選しなければならぬ。まず吉備真備は天武天皇の孫で既に皇族の籍から抜けている兄弟を推した。これに対して藤原一族が見つけ出したのが冒頭に紹介した天智天皇系・白壁王なのである。

あれこれ取り沙汰された候補者のうちで最も年齢が高い白壁王を強く推薦したのは内大臣・良継の末の弟で、傑物と言われたが官職は未だ少納言より下に居た藤原百川（ももかわ）である。吉備真備が推す候補は退けられ六十二歳の白髪ならぬ

白壁王が第四十九代の光仁天皇として即位した。この人は特に藤原氏と近かった訳では無いと言われる。切れる者の百川が着目していたのは光仁天皇の子である山部親王であつたらしい。藤原氏は先物買いのように桓武天皇を狙っていたのである。

光仁天皇は正妃として聖武天皇の皇女・井上内親王を迎えていたから義姉である孝謙（称徳）天皇の後継者としては適任と言えないこともない。二人の間に他戸（おさど）親王が居た。筋から言えばこの親王が次の天皇になるのだが、そうなるかと藤原氏が予定した桓武天皇が皇位に即けない。光仁天皇の治世三年目に他戸親王は皇族の身分を剥奪されて庶民に落とされた。母親の井上皇后が「天皇と天皇の姉である難波内親王を呪詛した目的は我が子・他戸親王を皇位に即けるため」とする筋書きである。聖武天皇の娘と孫であるこの母子は奈良の山中に幽閉され同じ日に憤死したけれども立派な怨霊となつて関係者に祟つた。それを宥めたのは比叡山を開いた最澄である。この事件は「巫蠱（ふご）の変」と呼ばれるが、庶民にはどうでも良いことなので知られていない。

皇后所生の親王が居ながら藤原氏の陰謀で亡くしてしまつた光仁天皇は、臣下を集めて皇太子を誰にすべきか意見を聴いた。天皇自身は称徳天皇のこともあり女帝でも良いと考えて酒人内親王を考えていた。それを知つてか知らずか、公家たちはお互いに顔を見合せて意見を述べない。藤原一族の出入を窺っているのである。その時に末座に居た藤原百川が筋書きどおり「…ここは第一の親王であり賢人であられる山部親王こそ皇太子たるべきお人なることは申すに及ぶまでもなきこと…」と大声をあげて奏上したのである。

## ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」

を開いています。（各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円）

絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）

詩を手話で舞う「朗読舞教室」（講師：小林幸枝 白井啓治）

朗読教室（講師：白井啓治）

エッセイ教室（講師：白井啓治）

教室の詳細は、...

「ことば座事務局」（担当：白井）電話 0299-24-2063 E-mail : shirais3@maple.ocn.ne.jp

までお問い合わせください。

それに対して百川の従兄弟と思われる京家藤原一族の浜成が「…山部親王は御母君の身分が極めて軽く天皇には相応しからず、第二皇子の稗田親王を立てるべし…」と反対意見を述べた。浜成はこれが原因でやがて出世街道から外される。両方の意見に対し、その他大勢の輩が賛否両論の無駄な発言をしている中で「頃はよし」と末席から上座へしゃしゃり出た主役の藤原百川が、歌舞伎役者のような表情で天皇の前に立ち公家どもを睨みつけて次のような演説をぶちあげた。

「…古来、太子を選ぶときは徳を論じて母の貴賤を論ぜず唐・舜も身分低き王を選び。君王を立てるは天下の為に私事にあらず。例え貴尊なりとも天下の人民これに従わざれば誰と共に其の貴尊を保たん。母の身分高からずとも賢徳あつて萬民迎従せば、四海泰平にして宝祚万歳なるべし。況や（いわんや）山部親王は王の中の年長者にして徳あり。何ぞ母の賤陋（せんろう）高貴ではない）を議せんや…我、儲位（ちよい）天皇の後継ぎ（の）定まるを聞かずば肯て宮殿を退かし」つまり天皇は天下萬民のために在る。本人が良ければ生まれなどどうでもよからう。山部親王が選ばれなければ私は此処を動かないぞ…と云つて光仁天皇を脅迫したのである。天皇も自分の子から選ぶのだから絶対にダメということでは無い。山部親王（桓武天皇）を選んだ。（前々太平記）藤原浜成が反対した母親の身分というのは百済（くだら）亡命者の血筋のことで、山部親王の母は高野新笠（たかののにいがさ）と言ひ和乙繼（やまののおとつぐ）と言つ婦化人の娘なのである。天皇家自体が朝鮮半島から九州へ渡つて来た民族と思われていることからすれば百川の演説では無

いが「賤陋を議せんや」である。多分、嘘の神話の影響で、この頃に支配階層に「日本人」の自意識が強くなり婦化人を馬鹿にしたのであろう。

話は少し逸れるが源頼朝など源氏の祖とされる清和天皇は桓武天皇の子・嵯峨天皇の曾孫に当る。天安二年（八五八）十一月に九歳で即位した際に勿論、本人が言い出した訳では無いが、伊勢神宮と天皇・皇后陵墓、それに藤原氏の墓から計十四か所を選び「十陵四墓」として諸国から献上された初穂を供えることにした。この行事は「荷前の使（の）さきのつかい」と名付けられた宮中行事として定着した。天智天皇、志貴皇子、光仁天皇、桓武天皇、崇道天皇（桓武天皇の同母弟・早良親王）皇太子に立てられながら陰謀で幽閉され絶食死して怨霊となる、平城（へいせい）天皇、仁明天皇、文徳天皇、それに高野新笠、藤原乙牟漏の二太上皇太后の十陵墓と藤原鎌足などの四墓で、天智天皇系の復活と継承を象徴した先祖崇拜の行事と思われた。ところが藤原良房が人臣最初の摂政になると貞観十四年（八七二）には対象から高野新笠陵墓が削られ、藤原一族を加えて十陵五墓にされてしまった。桓武天皇即位時に藤原百川が主張した血筋を問わない意見は否定され、高貴な家と勝手に決めた何処の馬の骨とも分らない藤原氏の専制政治が始まるのである。

天応元年（七八一）年四月、光仁天皇は病気の理由で皇太子・山部親王に皇位を譲つた。桓武天皇の登場である。光仁天皇の治世は十余年、再就職であつたから既に後期高齢者に達しており年末には他界した。皇太子も景気の悪い会社ならリストラで肩を叩かれる年齢に達していた。桓武天皇が即位したこの年は東北各地に賊徒が横行して農

民から食糧などを奪う事件が頻発した。その為に村人は山野に隠れ或いは逃亡して田畑を耕作することが出来ず荒れていた。国府も食糧不足で兵士が討伐に出動出来ない状態でも合戦どころではない。そこで常陸、下総、武蔵など関東諸国から取り敢えず十萬石分の食糧を供出させて陸奥国府へ移送した。東へ東へと侵入してきた大和朝廷の威光も未だ日本国中には至らず、石岡辺りで停滞していた。先住民族の縄文人が多く住む東北地方の制圧に大陸系婦化人の坂上田村麻呂が登場するのは十五、六年先のことになる。

それまでの日本は中国大陸や朝鮮半島の動静に注意が向けられており、国土防衛の拠点は九州にあつた。奈良時代末期から平安時代にかけて唐・新羅の興隆により朝鮮半島の緊張が緩和され西方の防衛は心配が無くなった。それに変わつて大和朝廷の新たな懸念となつたのが、征服して東北へ追い込み国司や官軍を置いて治めていた蝦夷と呼ばれた原日本人の動きである。大和朝廷はあれこれと役職を決め、少なからぬ軍勢を付して抑えていたが、中央政府の腐敗、特に天皇を中心とする権力闘争により政局が混乱していれば権力基盤が緩み反乱が起き易いのは万国共通のことである。

弓削道鏡が失脚した年には、それまで協力的だつた現地首長が態度を変えて本拠地へ引き上げたのを皮切りに、光仁天皇時代の寶龜五年には陸奥の人々が蜂起して官軍の城砦を奪い、鎮守府將軍が多くの軍勢を動員し鎮圧を繰り返していた。この争乱は数年間も続いた。桓武天皇が即位する前年には、現地に派遣されていた朝廷の監察官が服従していた蝦夷の首長に城砦内で殺害される事件が起こつた。通俗史では首長の愛人だつた地元

で評判の美人を監察官が奪おうとしたことから起こった事件としているが、背後には圧政に対する被征服民の抵抗があったことは間違いなくこの争乱は桓武天皇の即位後まで続いていたのである。

国家的に極めて大変な時期に即位した桓武天皇であるが、その割に夜は暇で、多くの妻妾を身近に侍らせて三十人ほどの子女を儲けた。まず最大の功臣である藤原百川の兄で、光仁天皇時代に内大臣を務めた藤原良継の娘・乙牟漏が皇后に立てられて平城・嵯峨両天皇を生み、百川の娘・旅子は淳和天皇の母となった。早逝した宇合の長兄・武智麻呂の孫になる是公の娘（吉子）も後宮に入り伊予親王を生んだのだが、この母子は平城天皇の時代に謀反の罪で捕らえられ自殺した。謎の事件であるが皇位継承の醜い争いが推測される。

藤原氏以外では古代からの名族・多治比氏の娘である真宗（まむね）父は参議の多治比長野）が居る。乙牟漏、旅子、吉子と多治比真宗、この四人が皇后及び準皇后の待遇を受けており、その他記録に載せて貰えなかった側室は数え切れないほど居たと思われる。選ばれたと言うのも変だが、桓武天皇の皇后及び準皇后として扱われる四人の女性が生んだ男児のうちで、早くから優れた人物と言われながら、天皇にも成らず消されもせず、宮廷の一員として堅実に職務を果たしていたのが平氏の祖となる葛原（かずらはら）親王である。桓武天皇の即位は藤原氏無くしては実現しなかった。しかし良継、百川など一番の功労者である人々は流行した天然痘か何かで倒れ、肝心の時には此の世に居なかった。辛うじて天皇の側近として残ったのが百川の甥・藤原種継である。そして種継の伯父・田麿、北家の魚名、南家の継縄とは

公らが政権を支えていた。即位前から蝦夷の反乱で頭が痛かった桓武天皇であるが、治世二年目の正月早々には思いもかけぬ人物の謀反に驚かされることになる。「氷上川継（ひかみのかわつぐ）事件」という。この人物は何者なのか？

に怒られたことがある（理由は不明）というので称徳天皇に嫌われ候補から外されていた。後に恵美押勝が反乱を起こした際には次期天皇として担ぎ出され誅殺されてしまった。その塩焼王の次男が氷上川継なのである。

先に、聖武天皇から後継者の指定を受けながら女性問題でしくじった道祖王の兄に塩焼王という魚料理のような名前の人物が居た。天武天皇の孫であり、称徳天皇の妹婿でもあるから一応は皇位継承者の候補にはなったのだが、かつて聖武天皇

延暦元年（七八二）の正月十一日に、新年であるから警備態勢が特に厳重だった宮殿へ侵入しようとした忍者が捕らえられた。上手く忍び込んで回廊の下に隠れていたのだが、当てもインフルエンザが流行していて、隠れている時に咳が出た

## ふるさと風の文庫

### 新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の  
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代) (1000 円)  
菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価：500 円)  
伊東弓子作 「風のかげ」 (定価：400 円)

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」( ・ / ・ / ・ )  
(二冊組：1000 円)  
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価：500 円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと  
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」 (定価 500 円)

### 日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価 500 円)  
小林 幸枝 「風に舞う」 (定価 500 円)  
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組：800 円)  
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組：800 円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457  
・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)  
電話 0299-24-2063

め見つかってしまった。武器を持っていたので単なる盗賊では無いと厳しい尋問が行われ、助からないと観念した犯人は全てのことを白状してしまった。それによると、男は名を大和乙人と言ひ、今回は失敗したが業界では知られた忍者の達人であると主張した。雇った主が氷上川継で当時は因幡守（島根県知事）に任官されていた。

乙人の自白に依れば、主の川継が謀反を企み、近日中に兵を集めて宮中へ攻め込む手筈が既に整っていて、今回はその引き込み役で来たと言う。謀反の理由は桓武天皇即位に対する不満である。父の塩焼王が誅されたとき川継は嬰兒だったために助かり一応は下級官僚として生きている。桓武天皇に比べると、自分の父は天武天皇の孫で母は称徳天皇の妹（自分は聖武天皇の孫にもなる）であるから天武系を継ぐ天皇の地位は自分の方が相応しい——とする思いがあったかも知れない。勿論川継理論が通る訳も無く、捕まって死罪になるところ自慢の血筋が幸いして伊豆に流罪となった。

一応は皇族に入る人物が企画したこの事件には、多方面の者が嫌疑を受けたようで、証拠不十分により釈放された官僚もかなり居た。その中で政権を支えていた藤原魚名が事件に連座して九州へ左遷されたのは桓武天皇にとっても痛手であった。川継の事件が一段落した頃、東北地方では陸奥国に影響されて出羽国でも反乱が起こり雄勝・平鹿の二郡（宮城県寄り）が政府の手から奪われた。此の地方は百姓の逃亡離散を防ぐために三年間の免税を布告したばかりであったので、大和朝廷にとつては政策の失敗を裏付ける出来事になった。その数年後、奈良の都に行く予定だった渤海国（ほぼつかいこく—中国東北部、遼東半島辺りの小国）

の大使一行が乗った船が漂流して出羽国に至り、村人たちに財物などを奪われる事件が発生したのだが、報告を受けた政府は何の措置も出来ずに、「ああ、そうですか……」と言うしかなかった。

国際問題に関する事件にも対応できない大和朝廷が、その頃に最重要課題としていたのは「遷都」であった。奈良の都を捨てて新しい首都を造る——国民の負担のみ増えるこの場違いな計画が、なぜ起こったのか？その理由で尤もらしいのが「東北地方の支配統治を強化するため、仏教に毒されて腐敗した奈良を捨てる——天武系天皇の庇護に依り強大化した仏教との決別」、そして「氷上川継事件や疫病の流行、諸国の飢饉など悪しきことを避ける」ためと推定しているのが現代の史書である。之に対して古い史書では「方角が悪いから……」とインチキ宗教が喜びそうな説を記録している。

氷上川継の伯母に当る井上皇后（聖武皇女）と、その子・他戸親王（皇太子・桓武天皇異母弟）が光仁天皇を呪い殺そうとした嫌疑を受け非業の死を遂げて事件も、自分の皇位継承に深く関わっていたことを知っている桓武天皇には奈良放棄の理由になつていたと思われる。そして皮肉なことに新しい都として選んだ長岡京（京都府長岡京市・向日市）への遷都問題が、桓武天皇自ら選んだ皇太子・早良親王（さわらしんのう—桓武同母弟）を犯罪者として断食死させることになる。

飛鳥・奈良・平安時代の首都移転は天皇の思い付きで行われた印象もあるが、裏を返せば強引に創られた大和朝廷の権力基盤が極めて弱体だった：結果的には、桓武天皇が京都に遷した首都（平安京）は明治維新まで一〇七五年続いたから言うことは無いけれども、天智天皇は飛鳥から近江に

遷り、天武天皇は飛鳥に戻し、持統天皇は藤原京（橿原市）を造営し、元明天皇が平城京を開いた。聖武天皇などは平城京に居ないで周辺をうろついていたから、役人は行く先々に都を造営させられて苦労した。そして桓武天皇の時代に長岡京へ遷る計画が持ち上がったのである。一軒の引越しても容易では無いのに国家の首都を移転させるには膨大な予算を伴う。それは全て人民の負担である。「天皇の寝付きが悪い」ぐらいの理由で都を移されてはたまつたものではない。役人はもとより国民の間には恨みの声があがった。

桓武天皇の意図を察して遷都を提案したのは側近の藤原種継だとされている。当時は中納言で式部卿に任命されており、新たに「長岡京造営使」を兼務することになった。候補となる各地を比較検討した結果、延暦三年（七八四）五月十六日、桓武天皇は藤原種継と藤原小黒麻呂（北家嫡流・中納言）の二人を呼んで「長岡の地に新首都を建設するよう」に勅した。直ちに国土交通大臣が呼び出され、訳の分からないまま急ぎ作業員を手配するように命じられて目を白黒させた。遷都となればそれまでの御所を解体して主要な門などは移築するから大変な作業である。工事は六月から開始され、十一月頃にはプレハブ式の宮殿だけは出来たようである。引き続き官庁の移転やら市民の移住が必要になる。長岡は山城国に属している。桓武天皇は山城国鎮護の神である賀茂神社に勅使を使わして遷都の報告をした。これは天皇が土地の豪族たちに対して「宜しくお願いします」と挨拶をしたことになる。

事業は手作業ながら順調に進んでおり、嬉しくなつた桓武天皇は藤原種継らの取り巻きを連れて

長岡付近の山野の視察を兼ね、好きな狩りに熱中していた。疎かになる政務は皇太子である同母弟の早良親王が残業をしながらこなしていた。親王には長岡京への遷都が必要とも思われず、種継らの側近が、多少ノイローゼ気味の天皇を唆して余計なことをさせたと思っている。そうした折りに早良親王に仕える佐伯某が良く親王を補佐して勤務に精励するので、この者を参議（大臣、中納言に次ぐ重職）に任じたいと天皇に奏上した。これに対して藤原種継が「：佐伯氏は参議の家格に有らず：」として勅許が差し止められた―この説も怪しい節はあるが：天皇派と皇太子派との間に官僚同士の対立が生じたことは否定できない。

ここにおいて種継の専横を憎んだ早良親王は桓武天皇に佞臣（ねいしん）を退けるように奏問したのだが天皇は親王の言葉を用せず、却って親王を政務から遠ざけてしまった。親王は周囲に不満を漏らしたことであろう。延暦四年の夏、天皇は奈良の旧都に出かける用事があり長岡京には留守役として藤原種継らが残った。絶好のチャンス：或る夜に何者かが藤原種継を狙って射かけ二筋の矢が胸を射通した。即死ではなかったが何も言い残すことも出来ず、藤原種継は翌朝、四十九歳で終わった。急を聞いて駆け付けた藤原一族は、先ず奈良へ使者を走らせ、事件を天皇に報告した。奈良から戻った天皇は寵臣の声を聞くことが出来なかった。狙われた時、種継は街を見回っていたとする説と本を読んで居たとする説がある。どちらでも痛いことには変わり無いからどうでも良い。直ちに犯人の詮索が始まり、万葉歌人として知られた大伴家持、参議になれなかった佐伯今毛人（さえきのいまけびと）など早良親王派の中級官

僚が疑われた。逮捕者は数十人に及び、暗殺の実行犯は天皇、皇族などを護る職務の役人だったことがこの事件の根深さを表している。大伴家持は事件直後に病死したのだが、有罪とされて死んでいるのに罰を受けた。勿論、死んだ本人はどんな刑でも痛くも痒くも無い。取り調べが進み結局、皇太子・早良親王の関与が疑われ、身柄を拘束された。留置所の食事がまずかった所為では無いが、親王は自ら食を断って未決中に衰弱死した。死後に淡路島へ流罪と決まったので馬鹿公家は親王の遺体をわざわざ淡路島へ運んで埋葬したと言う。

此の事件は端的に言えば、藤原氏と大伴氏など古代からの豪族との対立であり、桓武天皇の後の皇位継承を巡り、第一皇子でも皇太子になれなかった安殿（あて）親王と、皇太子になった皇太弟・早良親王との間の暗闘が容易に推定できる。背後には安殿親王の生母である皇后（藤原乙牟漏）の思惑もあつた筈で、程なく十二歳の安殿親王が皇太子となり、後に平城天皇として即位する。

寵臣を失い、その因果関係で皇太子にした弟の早良親王を罪人として餓死させてしまった桓武天皇は精神的にかなり参っていた。そこへ追い打ちをかけるように親族の死が重なった。まず、第二皇后の藤原旅子、皇后の藤原乙牟漏、天皇の生母である高野新笠などが病死し、皇太子に立てた安殿親王も体調を崩した。蝦夷の反乱は収まらず、天候不順で飢饉が続いた。陰陽師を呼んで占わせたところ、陰陽師も科学的根拠が無いから「早良親王の祟り」としてお茶を濁すことにした。早良親王には「崇道天皇」の号が贈られ、大伴家持の罪は帳消しとなり、さらに諸国の国分寺には「読経を盛んにせよ」と言う命令が来て、近所迷

惑なほど坊さんが拝み出した。それでも天災や反乱、病氣などを何とかするのには陰陽師とお寺だけでは限界がある。延暦九年には都の近辺に天然痘が流行して多くの患者が出た。祟りが未だ続いていることを知った桓武天皇は、再び都を遷すことを思いつくのである。今度は念を入れて賀茂社と伊勢神宮のほか、始祖の天智天皇陵墓にも報告をした。こうして選ばれたのが山背国葛野郡宇陀村であり、延暦十三年十月二十三日、出来てから十年しか経っていない長岡京を壊して置かれた都が「平安京」：名前は平安でも虐げられる人々の抵抗は止まず、坂上田村麻呂が征服者として登場することになる。桓武天皇の頭痛は長く続いた。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を  
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声をつるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
0299-55-4411

一行文詩「風語り」

白井啓治

正月、炬燵に猫を抱いて潜り込み、怠惰にうつらうつらしている時、ふと一行文詩を詠む時の雅号を考えようと思いついた。それで早速「雨露」なる号を考えついた。雅号が考えつくと、今度は雅号を持つにふさわしく、雑木林の中に庵でも必ずべたらどんなにか幸せな気分になるだろうと夢を見てしまった。

他愛もない夢は現実を離れどんどん発展していく。むしろ庵は何と称しようか。そうだな、瘦せ男の庵なのだから「瘦風庵」なんてのはどうだろうか。うん、瘦風庵がいいだろう。悠々自適な老いの道楽ではないのだから、瘦せた風で良いだろう。

一行文詩などという認知も市民権もない、種田山頭火を真似てのちびた詩文の作者の称号としたらこんなもので良いだろうと、些か卑下するにも似たる感で記してみるも、実はどうしてどうして当人は「よしよし」と悦にいつている。

今度から、一行文詩をここに発表する場合は雨露の名で載せてもらおうと思う。しかし、白井雨露ではどうも面白くない。瘦風庵を持つことは夢の夢であるから、白井を瘦風ではなく草風の亭と称し、草風亭雨露にしたいと思う。

ここ二年ほどは、家の近所の雑木林に散歩することが余りなかった。散歩の時間がとれぬほど忙しかつたわけではないけれど、ちよつとの忙しさに怠けていたら、散歩に出かけるのが億劫になってしまったのである。もつともらしい言い訳をすれば、この三年間、ことば座が二カ月に一回の定期公演をこなしてきたものだから、脚本の執筆と

稽古で手いっぱい。そこに一昨年の七月から昨年六月までの一年間月三回の約束で常陽新聞にエッセイを書かされていたこともあって、この会報「ふるさと風」の編集を加えると、のんびり風に語り合う気分を作るのが面倒になっていたのである。

二〇〇三年から二〇〇七年までは毎年、散歩しながら風に戯れて交わした一行の詩を小冊子に纏めてきていたのであるが、八年、九年は風語りした文が少ない事もあるが纏めていない。一行の風語りは、己のしぐれを見届けるためのマイワークではあるのだが、些か疎かに隅に置いておいた感がある。

《ふるの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。  
電話 0299 43 6888

炬燵に猫を抱いての怠惰の中に思いついた一行詩文のための雅号であるが、こんなことを思いつくのも、思い新たに確りと風語りせよという事なのである。

草風亭雨露などと新に号してはみたが新しき詩のあるわけではない。一行文詩であろうが二行文詩であろうが、心意識して心無意識になければ風語りなどは生まれるはずもない。句帳のめくって

拾い出してみた。

- ・ぐるっと見渡せばぐるっと常世の国
- ・風が吹いて葉が裏返って笑った
- ・古き衣のぬぎ捨てて新しき恋衣肩にかけ
- ・石ころだらけの小道ひとりごとぼ
- ・独りとぼとぼ生きておる
- ・きょうはどこ行く あてもなし
- ・思わぬところで国の名を聞く
- ・この年の最後にうれしきことひとつ
- ・春うらら気分もうらら恋三つ
- ・田の土に女子のかくしどころの匂ひ隠して
- ・風の景はみえたかと雑木林のいふ
- ・激しき五月雨の何を流すか心きく

雨露

編集後記

インターネットや携帯メールの氾濫で、文章に言葉を表すことが復活してきたと喜んではいないのであるが、同人誌などは年々萎んでいるように思えてならない。何故なんだろう。当会でも原稿を書く会員、投稿者を募集しているのであるが、参加者がまるでない。さみしい事だ。今年こそは、新しい参加者が、と願うばかりである。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

# 朗読舞劇団「ことば座」

ことば座は、ふるさと「常世の国」の暮らしの歴史を大切に考え、明日の希望の物語を朗読舞に表現する劇団です。朗読舞は、ふるさと「常世の国」に生まれた全く新しい舞台表現です。朗読を「手話を基軸とした舞い」に演じる小林幸枝は、世界でただ一人、朗読を手話に舞う女優です。ことば座は、ギター文化館を発信拠点として朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています

2010年ギター文化館定期公演予定

第18回定期公演 6月18、19、20日

第19回定期公演 11月19、20、21日

その他、8月には薪灯りによる朗読舞を計画中です。

ことば座では三年間の第一ステージの活動を終了し、本年より第二ステージの活動となります。ギター文化館以外での公演等の活動も積極的に展開してまいります。詳しくはことば座事務局までご連絡下さい。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

## 朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

### あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優及び朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂きます。研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

#### 募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース  
募集人員：6名程度（最大10名まで）  
面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り  
養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）  
指導月4回  
受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

詳しくは、ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井までご連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp